

北海道東部・十勝の自然

— 動物相の推移と保護 —

芳 賀 良 一

十勝は地形的には北に大雪山系、西に日高山脈、東に阿寒山塊というけわしい山岳を背し、その間に南は太平洋岸にいたるまで広大な十勝平野が展開する。またその中央には、十勝川水系や日方川水系などいくつかの河川が流れ、太平洋沿岸一帯には長節沼・湧洞沼・生花苗沼・ホロカヤントー沼・キモントー沼などの湖沼や湿原が発達し、地形的にすこぶる変化に富んでいる。十勝平野をとりまくこれらの山なみには、太古から豊かな森林が繁茂し、よく繁った木や草は野生動物の繁栄をもたらした。また分水嶺から流れくる水は豊かな河川となって原野をうるおし、荒地を肥沃な農地にかえ、さらには水産資源をも豊かにした。このような充実した自然環境は、生物相を豊かにし、産業資源となって地域の発展の基盤をなしてきた。

しかし、この豊かな十勝の国土が注目さ

れるようになったのは、明治十三、四年の頃からで、それまでは道東方面はまだ人跡まれな状態であった。そのころ大発生したバッタの発生地調査から、偶然にも広大な十勝平野が発見され、開拓適地としてクロイズアツプされたもので、まさに、バッタの羽音が今日の発展をもたらしたものと見える。

当時の十勝平野は単なる原野ではなく、見わたすかぎりうっそうとしたカシワの樹海であった。開墾はカシワの伐採からはじめられた。そのカシワ原生林の壊滅にはくしやをかけたのはタンニン工業で、カシワの樹皮からタンニンを抽出するため、大量に伐採されたのはたしかである。皮革のタンニンなめしは、明治二十四、五年頃から山陰、四国のシイの皮をとって行なわれていたが、原料不足からまず北海道の勇払原野のカシワを切りたおし、切りつくすと十勝

のカシワに目をつけたのである。

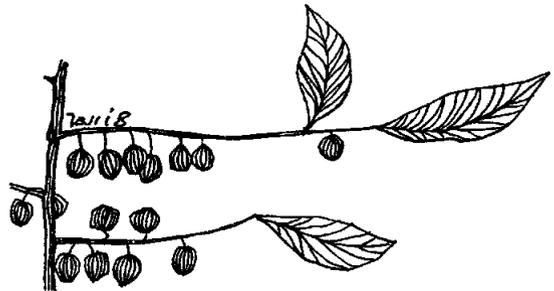
はじめのうちは樹皮を買付けて大阪方面に送っていたが、大正二年には暮別町にタンニン工場をつくって生産をあげた。カシワは伐採してから樹皮をはぐのだが、人夫は能率をあげるため、立木の手のとどくところまでをつぎつぎに裸にするなど、乱伐がつづいた。そのため年間約三、〇〇〇haのカシワ林が犠牲になり、さしものカシワの原生林も、またたく間に消滅してしまつた。

また、川筋に多いオニグルミは銃床材として、ヤナギ・ドロ・シナなどはマッチの軸木の原料としてどんどん伐採された。しかし大正末期にはいずれの資源も涸渇し、それらの工場はやがて消滅した。農地開拓には邪魔になる立木はすべて切り倒され、ほとんどが利用されぬまま焼かれた。この木焼が夜となく昼となく続けられ、天を焦

がす有様だったといわれている。

北海道の開拓の初期には、どこでも似たようなことが行なわれたが、その結果、山野は農地に生まれかわり、農業生産の基盤をなし、今日の発展をみたということである。

一方、林業生産のため十勝川源流・裏大雪一帯のエゾマツ・トドマツの大森林も、また日高山脈のうっそうたる広葉樹林も、どんどん伐採された。やがて林業生産は、里山過伐の是正から奥地林の開発がとえられ、山はまたたくうちに大きくに姿容した。千古斧を知らぬ天下の美林も、濃密林



道や機械伐採の前にもろくも消えうせ、パ
イロット・フォレストのような人工一斉林
におきかえられていった。

しかし、人智をあつめた緑の創造が大地
に与えられたとしても、美しく充実した自
然相は容易に恢復できそうにもない。林業
政策の基本的課題である、林業総生産の増
加を図るため、積極的に林道を開設して
低開発森林資源の利用を促進することを目
的とする考えは、自然界における生態系の
原理・環境保全の意義を十分反映していな
い。森林のもつポタンシヤル・エネルギー
を正しく評価することが必要であろう。

経済性を尊重するあまり、森林のもつ公
益的機能が軽視されてはならない。なぜな
らば、人間もふくめてすべての生物は自然
界の生態系を構成する一要因であり、生物
の生産性の高い森林は多くの生物の生活基
盤である。環境と生物との全一体の中に相
互のバランスが保たれ、そのバランスの中
に、人間が生きてつづけることが重要なので
ある。したがって、自然保護と開発の調和
も、基本的には生物の生産性の低い地域を
高める方向で思考することにより達成され
るものといえよう。

§
十勝の動物相は、こうした自然環境の推
移を背景にはげしく動揺し、雄大な十勝平

野を舞台に、野生動物の栄枯盛衰がドラマ
チックに展開した。ドラマの主役は、エゾ
オオカミとエゾシカとヒグマであろう。和
人が十勝平野の内陸部にやってくる以前は
少数のアイヌ民族が、生態系の一員として
自然の中にとけこみ、明るく健康な、悠々
自適の生活をおくっていた。

彼らは、天然のオオバイラクサやムカゴ
イラクサやオヒョウダモの皮でつくったア
ツシをまとい、シカの皮やサケの皮でつく
ったケリをはぎ、山野を駆けめぐって狩猟
生活を営んでいた。彼らの食物であるサケ
やシカは無限にちかく、自生する野草も彼
らの大切な食料源であった。

北海道東部・十勝地方は、胆振や日高と
同じようにエゾシカの越冬地である。冬期
の寒さはきびしいが、積雪が少なく、食物
である笹や草またナラ・カシワの実が豊富
にあり、越冬地として適していた。エゾシ
カは秋になると石狩・空知から大挙して移
動してきた。移動コースは、主にオプタテ
シケ山の東北の一番低いところを越え、十
勝川の上流に出て十勝入りしたといわれ、
いまの鹿越という地名の由来にもなってい
る。また、帯広と然別湖の中間に広がる鹿
追町には、むかし鹿を追いこむ木柵がつく
られていたところで、シカを遠巻きにして
柵の中に追いこみ、大量に捕獲したので鹿

追という地名が残った。当時は、いかにた
くさんのシカが生息していたかがうかがわ
れる。

しかし、明治十二年の北海道大雪害のと
き、大雪で大量のシカが死亡し、十勝川の
支流である利別川や札内川の流域には死体
が累々とし、夏にその肉がぐさりだし、附
近は悪臭にみち、川の水も腐臭がはげしく、
飲料水にも事か有様であった。また落ち
角も、その年だけで十六万本というおびた
だしい数であったという。この年をさかい
に、エゾシカはどんどん減少していった。

エゾシカはアイヌ民族の食料源であつた
が、エゾオオカミにとっても重要な食料で
あつた。エゾシカが減少してからは、その
天敵であるエゾオオカミは、エゾノウサギ
やエゾタヌキ・キタキツネなどを捕って食
べたが、食糧としては十分ではなく、その
頃からようやく盛んになりはじめた開拓使
の放牧馬をおそって食べるようになった。

放牧馬の生態的地位は、北海道において
はまさにエゾシカと同類であり、かっこう
の餌となつたわけである。北海道のオオカ
ミはニホンオオカミと異なつて、シベリア
系の大型なオオカミで、非常にどう猛であ
る。しかし人間をおそふことはまれで、ア
イヌは狩猟の神オオセカムイとして貴び、
すすんで捕獲することはなく、多くの動物

神よりも大切にとりあつかわれていた。

しかし、しばしば部落にあらわれて飼
犬をおそつたり、また夜外出するときに犬
の毛皮の防寒具を着ていると、子供などは
しばしばおそわれることもあつたといわれ
ている。ともかくエゾオオカミは、エゾシ
カとともに移動し、石狩・日高・十勝に多
く生息していたが、エゾシカが衰退してか
ら急速に減少した。

他方開拓使は、放牧馬を守るためストリ
キニーネを用いて毒殺を実施し、また捕獲
奨励金を出すなど捕獲駆除に全力をあげた
ことも、エゾオオカミの衰退を早めた。そ
の結果畜産は振興したが、エゾオオカミは
明治二十一年以降は、ふたたび姿をみるこ
とができなく、明治二十九年数枚の出荷毛
皮を最後に、この世から完全に絶滅した。

絶滅の原因は人為的な駆除結果によるもの
だが、エゾオオカミの習性自体にも問題が
あつた。それはリーダー制にもとづく群れ
生活が、人智に破れたとき一網打尽に捕え
られ、大量死につながり、絶滅にはくしゃ
をかけたものといえる。その点、単独生活
するヒグマを減少できない理由もそこにあ
つて、学術的に興味ぶかいものである。

エゾオオカミが絶滅すると、山野はエゾ
シカの天下で、保護政策の効もあつてふた
たび増加した。そのため明治三十三年に一

時解禁になったが、大正九年からふたたび
禁猟となった。しかし禁猟後も、人口の増
加とともに生息地が急速に開発されたため
環境の急激な変化に十分に対応できず、細
々とした生存であった。しかし、第二次世
界大戦で開発が後退したため、ふたたび増
加をはじめた。(犬飼、一九五六)

昭和三十年には、農作物の被害防除のた
めに十勝・日高・北見の一部の地方で解禁
になり、今日に至った。いまはトムラウシ
・新得方面と足寄・阿寒方面・また日高山
脈北部地方に多く生息する。しかし奥地林
の開発で、エゾシカは生息地を追われ、ま
た大量の枯草剤散布によって笹や野草が大
面積にわたって枯死したため、食物不足を
きたした。エゾシカが食物を求めて山間部
の畑を食い荒らすのは、当然の帰結といわ
ねばならないだろう。

林道は深山まで農密度につけられ、交通
が発達し、銃器もいちじるしく進歩し、ま
た狩猟者も増加するという現状で、十勝・
北見・日高のエゾシカの個体群は、いまま
た急激に減少し、衰退の兆をみせている。

このような現象は、エゾシカにかぎった
ことではない。原生林性の野生動物ではさ
らに衰退がいちじるしく、恢復はきわめて
むずかしい状態にある。たとえばエゾクロ

テン、エゾイタチ、コエゾイタチなどは、
食性が比較的単純で、適応性が劣しく、また
繁殖力も低い。元来が生息数の少ない動物
であるため、開発とともに急速に減少し、ま
れにしか姿をみるることができなくなった。
開発は、野生動物の生息地をせげめ破壊す
るばかりでない。帰化植物が侵入して在来
種を駆逐してしまうように、動物界にあつ
ても生息的地位をおびやかす対抗種が侵入
すると、しばしば適応性の低い在来種を駆
逐して、衰退にはくしやをかける。

イタチは元来、北海道に生息していなか
った動物であるが、明治初年に本州から函
館に侵入し、そこで自然増殖した。その
後、明治三十二年頃から急激に増加し、函
館から内陸部へと北上し、約七五年を要し
て昭和十五年には全道一円に分布した。函
館から北進したイタチが大雪山・日高阿山系
を越え、十勝地方に侵入してきたのは大正
十三年で、新得ではじめて捕獲された。そ
の後イタチは東進し、大正十五年に池田で、
昭和二年には足寄、昭和四年には釧路に出
現し、北見・根室へと侵入して、昭和十五
年には全道に分布するにいたった(犬飼)。
こうした移入動物が繁殖増加する原因は
天敵が少なくて繁殖力がよく、環境に対す
る適応性の強いことが基礎となる。とくに
人間の生活に関係が深い動物では、開発に

ともなつて人口が増加すると急速に増殖す
る。イタチはその点、典型的な発展をなし
えた。未開の北海道の山野では、人間は鹿
道を利用して通行し、やがて道路がつくら
れる。人口が増えて街ができる、街と
街をむすぶ道路には、やがて鉄道でしかれ
る。鉄道がつくと、街の人口はさらに急速
に増え、物資の移動も盛んになる。その結
果、人間生活に依存するドブネズミなどの
住家性のネズミが、移動繁殖する。

また森林を伐採すると環境が破壊され、
エゾアカネズミ・ヒメネズミなどの森林性
の野鼠が後退し、逆に荒廃地・草原・畑な
どには、繁殖力の旺盛な草食性のエゾヤチ
ネズミや、エゾノウサギなどが爆発的に増
加する。これらのネズミ類を追って、キタ
キツネやエゾタヌキなどの天敵動物が増え
る。やがて、適応性の強いイタチが侵入し
て増殖する。繁殖力が強い、新入りな
がらどんどん増殖し、人家周辺部からさら
に奥地へと分布していく。

これにひきかえ、純森林性のエゾクロテ
ンやエゾイタチ・コエゾイタチは、エゾヤ
チネズミが増大しても、荒廃地や造林地に
十分適応できない。やがて優勢なイタチが
侵入してきて、山奥へ後退せざるをえなく
なる。

昔の開拓地では、よくカテンがいなくな

るとイタチの天下、という言葉をきいた
が、イタチはノネズミの天敵としての生態
的地位をかちとり、森林保護の上に重要な
役割を果たすようになった。また、かつて
は輸出毛皮の花形として、経済的にも重要
な資源であったが、いまは野鼠駆除のため
に捕獲は禁止されている。とくに、道東地
方のように植生の単純な環境下では、野鼠
が異常に大発生しやすく、イタチの存在は
きわめて重要である。しかし、エゾクロテ
ンのような稀少動物や、エゾイタチ・コエ
ゾイタチのような在来種も、また重要であ
る。これらの動物の生きる道は残されては
いるが、衰亡の危機が去ってはいない。

北海道で絶滅した動物はエゾオオカミの
ほか、カワウソが絶滅し、あとでのべるエ
ゾミニビゲラもまた滅亡にひんしナクウサ
ギもいちじるしく減少してきた。カワウソ
は札内川や十勝川源流に、まだ生息すると
いう疑わしい説もあるが、個体群として生
息するものでなければ、たとえ五匹や一〇
匹が生き残っていたとしても、それは生き
た化石にすぎなく、種としては絶滅したも
同然である。

野生鳥獣の保護について、生息数が少な
くなり、稀少価値から文化財として保護す
る場合が多いが、本質的には誤りで、キタ
タキやトキやコウノトリのように、保護が

手遅れになる場合が多い。個体群に減少を
きざしたとき、積極的な保護対策をこうじ
なければならぬ。生物の種は動物ばかり
でなく、一木一草といえども、絶滅せしめ
るようなことは避けなければならない。

地球は人類が創ったものではなく、また
生物についてもしかりである。科学の発達
した今日でも、生命を人工的に創り出すこ
とはできない。まして進化した生物の種が
一度絶滅すれば、人類によって再現せしめ
ることは不可能である。ちよつとした自然
破壊でも、生物相にもたらす影響はきわめ
て大きい。とくに野生動物の世界は、生物
共同体の上になりたち、その食物網の關係
はきわめて複雑である。生物相の豊かなこ
とは、生態系の安定と高い生産性を示すも
のであり、また健全な自然環境の美として、
人類に無形の富を与えるものである。

森林の伐採によってエゾノウサギが急増
し、造林木に大害を与えるようになったが、
近縁なナキウサギはどうであらうか。大雪
山系や、日高山脈の高山帯にしか生息しな
い珍獣であるが、ナキウサギ個体群もまた
影響をうけはじめている。高山帯の岩場に
しかすめない適応性の低い動物だけに、登
山者とともに侵入してくるドブネズミの出
現は驚異である。黒岳やトムラウシ岳のナ
キウサギはもちろん、然別湖周辺の生息地

は人為的破壊が大きい。日高のカールの生
息地はもともと密度は高くはない。固定公
園の昇格にかこつけ、横断道路をつけられ
ると、重大なピンチに追いこまれよう。ナ
キウサギにとっては、人をおそうヒグマの
存在が頼みの綱である。

§

ヒグマはエゾオオカミと同様に、人間か
ら積極的に駆除されてきたが、絶滅するこ
となく、いまなおしばしば猛威をふるって
いる。開拓使以来、こんなに人類から強い
迫害をうけた動物は他にない。カラスもそ
の部類にあげることができるが、ヒグマの
比ではない。ヒグマについてはいまさら詳
しくのべる必要もないが、絶滅しない理由
は、習性上の三つの特徴にあると考えられ
る。第一は単独生活、第二は冬眠（穴ごも
り）、第三は雑食性である。習性上群れ生
活をしないため、一頭一頭を確実に捕獲し
なければならず、エゾオオカミやエゾシカ
のように大量に捕獲することができない。

また、狩猟につごうのよい積雪期には、
地中の穴で冬眠（穴ごもり）をし、他の動
物が食物に苦勞をしているときに、三カ月
も穴の中でねてくらすことができる。さら
に春に目ざめて、穴から出てくると、フキ
ノトウなどの野草を食べ、アリやハチの巣
を掘りおこして食い、シカやサケをとり、

ブドウやコクワの実を食べる。ときにはリ
ンゴやスイカ・デントコーンを食べ、放牧
した牛や馬やメソ羊をおそう。元来は肉食
性の野獣であるが、雑食性を獲得し、自然
環境の変化にもなつて、食性を適応させ
ることができるともなつて、食性を適応させ
る能力をもっていることも、
生存の強味である。

十勝のヒグマの推移はどうであらうか。
生息数は約三〇〇頭と推定され、捕獲数か
ら日高山脈にもつとも多く、阿寒山塊・裏
大雪とつづき、白糠丘陵にも姿をみせる。
日高山脈では、北部より南部・中部に多く、
とくに中部の札内岳周辺は、北海道の中で
も生息密度が高い。最近十勝方面では、乳
牛・肉牛の育成が盛んで、大規模草地や共
同利用牧場が数多くつくられ、四〇〜五〇
頭から一〇〇頭ちかい牛群が、いたると
ころに飼育されている。これらの牧場は、
奥地林開発などによって造成されたもので、
有の天然林を牧野に利用したもので、ヒグ
マの生息地や移動経路にあたる場合が多
い。そのため、被害を非常にうけやすい。

被害家畜は、昭和二十年以前は馬が主体
で、昭和二十七、八年頃はメソ羊が、また
昭和三十、八年頃からは牛に変わってき
た。これは牛の飼育頭数が年々増加し、馬
やメソ羊の飼育頭数が減少したことによる
が、陸別町では、昭和四十六年六月から十

月までに、死亡一四頭、重傷一四頭の被害
が発生した。北海道の乳牛の被害は、最近
十五年間の平均では、死亡五五頭、傷害二
八頭であるから、いかに冷害年型の被害に
しても、一町村の被害としては非常に大き
いものといえる。

ヒグマによる乳牛の被害は、こうした直
接被害ばかりではなく、二次・三次の被害
にまでエスカレートする。放牧地周辺にヒ
グマが出没すると、採食行動が制限され、
牛群が安全な場所からあまり移動しなくな
る。そのため、通常一頭一日当り平均一・
〇kgないし一・二kgの増体重であるが、五
〇〇g内外に低下してしまい、牛群全体の
成長に大きな損失をうける。したがって直
接被害にもまして、大きな問題といえる。

さらにまた被害が発生すると、安全のた
め放牧牛を全部畜舎に下牧させるため、牛
舎の搾乳牛の餌を育成牛に多量にとられ、
全体が餌不足となる。そのため育成牛の成
長は低下し、搾乳牛の乳量が減少するとい
う二次的な被害までおき、さらには、農業
経営自体にひびがはいるという結果で、一
部では深刻な問題となっている。

陸別町では、条令でヒグマ捕獲奨励金を
一頭当り二万円計上し、また農協でも八万
円を助成するということで、ヒグマ一頭当
り一〇万円の奨励金制度であるが、捕獲成

績はあがつていない。ヒグマは、家畜に餌づくつと習慣づけられ、つきつきと家畜をおり、被害はますます増大する。野生鳥獣による被害の責任はどこにあるか。自然保護の立場から明確にしておくことも大切である。

鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律の第一条に「本法ハ鳥獣保護事業ヲ実施シ及狩猟ヲ適正化スルコトニ依リ、鳥獣ノ繁殖・有害鳥獣ノ駆除及危険ノ予防ヲ図リ、以テ生活環境ノ改善及農林水産業ノ振興ニ資スルコトヲ目的トス」と明記されている。したがって野生鳥獣類は、国民的財産として国が保護管理し、すべての野生鳥獣類は法のもとに平等に保護されるたてまえである。

しかし、農林水産など産業上有害な鳥獣については、防除のために狩猟の対象にされていくと解される。狩猟については、国や道が狩猟税をとっている以上、有害動物の管理やその被害に全面的に責任があると見えよう。したがって、ヒグマのような捕獲のむずかしい特別な動物に対しては、町村が条令などで捕獲奨励金制度をもうけて駆除につとめ、被害の発生を予防しようとはかっている。しかし、国が防除の責任をとうろうとする前向きな姿勢がない限り、解決しそうにない。

狩猟税の一部を、捕獲したハンターに還

元することも必要だが、被害者に対してはなんの補償も助成もない。家畜を共済保険に加入している場合もあるが、掛金が高いため多くは半額程度の評価で加入しており、損害は決して少なくない。天災などについてさえ特別な措置があるのに、国が保護管理している鳥獣が明らかに加害者であるにもかかわらず、なんの援助もないというのはどうしたことだろうか。鳥獣保護の被害者不在の考え方はあらためなければならぬといえよう。

§

道東地方の動物相に特色をそえるものは、エゾミユビゲラである。昭和十七年十二月に井上元則博士・五十嵐文吉氏らによって発見されたもので、形態的に他のキツツキ類とかなり異なっている。雄の頭頂は黄色で、脚の趾が三本しかないのが特徴で、北海道でも十勝三股・幌加方面の森林にか生息していない。天然記念物の指定はうけていないが、元来、生息数がきわめて少ない。原生林性の鳥であるため、開発とともに姿を見ることは稀になった。しかし十勝の動物相の一般的な特色は、奥地の原生林や太平洋岸の湿原の開発が比較的ゆっくりとはじまったことから、深山性の鳥獣や

深山性の鳥ではクマゲラ・エゾオオアカ

ゲラ・エゾアカゲラ・エゾコゲラ・コアカゲラ・ヤマゲラなど、キツツキ類が非常に多く、また裏大雪の密林にはエゾミユビゲラやシマフクロウが繁殖し、日高の密林にはワシミミズクの姿をみることができ、その他コルリ・オオルリ・エゾムシクイ・メボソムシクイ・コサメビタキ・キビタキ・エゾカヤクグリなどはごく普通にみられ、溪流にはカワガラスが少なくなく、エゾヤマセミも時折りみかける。日高山脈・裏大雪一帯は、まさに野生鳥獣の宝庫といえよう。

他方、太平洋岸の湿原湖沼には、春秋にはおびただしいマガン・ヒシクイ・カリガネが渡来し、オオハクチョウもときどき姿をみることができ、また長節・湧洞・生花苗の湿原にはシギの類やタンチョウが営巣し、大木にはオジロワシも繁殖する。冬期にはオオワシもしばしば雄姿をみせ、海鳥も非常に豊富である。

平原の鳥も種類は多くはないが、春ともなるとシマアオジ・ノビタキ・ビンズイ・ノゴマ・アカハラ・ベニマシコなどがうるさいほどさえずる。また、さらにユキホオジロやオオモズも時折り渡来し、十勝の鳥相を一層豊かにしてくれる。

十勝の爬虫類や、両棲類・魚類の動物相はどうか。然別湖や十勝川水系や

日方川水系の上流には、オシロココマが生息し、上土幌の湿原からカラフトサンショウウオが発見され、種類は少ないが学術的に興味のあるものも少なくない。十勝平野の動物相は全ぼうがようやくわかりかけ、学術的研究も緒にいたばかりである。

しかし、自然開発はいろいろな美名のもとに急速にすめられ、自然相は大きく変ぼうしようとしている。アカトンボやエゾサンショウウオ、ザリガニも十勝平野から消え去ろうとしている。複雑きわまりない自然界の生態系を破り、画期的な人為の創造を大地に与えようとする試みは、人間もまた生態系を構成する一要因にすぎないことを考えるとき、天に唾する不安感をいだかされる。

緑豊かな自然は、人類がつづくかぎり永久に恩恵をうける元金であり、子孫にたえなければならぬ財産である。自然開発は、天然資源の利息のみを、人間社会に活用するよう展開すべきであり、今日の生活のために、明日の自然をぎせいにしてはならない。

(帯広畜産大学生物学研究室)